



第三中学校区



玉屋の椿

昔鯨波に玉屋徳兵衛という金持があった。何ひとつ不自由なく
らして、人々からうらやまれていたが、かぞえ切れないお金をどこ
にしまったらいいかという心配がおきてきた。そこで考えに考えた
末、誰にも知られないようにして、うらの竹やぶの中にある一本の
椿の木の根もとに埋めようと考えた。

或る暗い晩、こっそり夜中におきでて、椿の根本に深い穴をほ
て、誰にもわからないように埋めてしまった。それでひと安心した
ものの日がたつにつれて、もしもあの晩、誰かが埋めているところ
をこっそり見ていたのではあるまいか、と心配がまして、夜もねむ
れず、とうとう病気になってしまった。

家の人やまわりの人々は温泉にでもつかって気ばらしをしてはと
すすめた。徳兵衛もその気になって、番頭ひとりをつれて、加賀の
山中温泉へ湯治にいった。湯にはいつているうちに、だんだんから
だのぐあいもよくなりよろこんでいた。ところが或る日、徳兵衛の
耳にギクリとくる唄声がきこえてきた。それは誰か湯ぶねの中で、
越後鯨波、玉屋の椿、枝は白銀（しろがね）、葉は黄金（こがね）
とうたっている。徳兵衛は身におぼえがあるので、心配でたまらず
番頭を呼んでこのことを話すと、番頭は玉屋の繁昌をはめたたえた
唄ですと気にしない。しかしながら徳兵衛にとっては一大事、早速
かごを用意させて、いそいで鯨波のわが家に帰って来た。とるもの
もとりあえず、うらの竹やぶの椿の木のところに来ると、徳兵衛は

「アッ」と叫んでしまった。それもそのはず、椿の木は夕陽を浴び
て、唄の文句の通り、枝は白銀にかがやき、葉は黄金の花ざかり：
：：徳兵衛は余りのことに、ぼったりその場に倒れて気を失ってし
まった。家の者にかいほうされて、気がついた。家の者は突然の帰
宅といい、徳兵衛の卒倒といい、何のこともやらさっぱりわからない
「どうしたのですか」

と徳兵衛にたづねると、徳兵衛は、

「あの椿の根もとに、家中のお金を埋めておいたのに、あの椿が
お金の精を吸い取ってしまった。枝は白銀に葉は黄金にかがやいて
いるではないか」

と叫ぶ、しかし家の人やまわりの人にはそう見えないので、

「椿はちっとも変わったところがないではありませんか。」

といいますが、徳兵衛はきかない。そこでいわれた通り根本を掘
ってみたが、出るものは石や瓦かけばかり、お金はすっかりなくな
っていた。

註1 参考文献（順不同）

柏崎の伝説（市観光室）、社会科資料（鯨波小学校）、今昔の刈
羽郡（柏崎日報）、柏崎伝説集（桑山太市）、越後の伝説（小
山直嗣）、伝説の越後佐渡（中野城水）、ふるさとの伝説（坪
田譲治）、ラジオ放送台本（桑山太市）、長者伝説（関甲子次
郎）、越後の伝説（？）、？新聞（岡谷天芥）、鯨波雑記（田
村愛之助）、甲子楼文庫（関甲子次郎）、夢を買う話（石原亨）
あったとき（山田貢）、日本伝説集（高木敏雄）外伝承者

註2 主人公の職業については説区々

海産物商又は問屋（8）、単に金持、大尽（3）、廻船問屋、又は佐渡通いの商売（2）、単に働きもの、浜で金箱を拾った、旅人より強奪した財産：：各一

註3 保養地

加賀の山中温泉（7）、松之山温泉（7）、越中の山中温泉（1）、広田の湯（1）

註4 伴っていった者

番頭とするもの（5）、下男（4）

註5 問題の唄をうたったもの

もうもうたる湯気の中から誰かが（4）どこからともなく、誰かが（4）

となりの湯屋の三助が（1）

客室、酒席の湯女のうたう（1）

註6 結末

告白して死亡（3）、卒倒して死ぬ（2）、ぼう然として気絶（3）、気絶して病床に（1）、卒倒―病臥―告白、海へ投身自殺（1）

註7 玉屋のあと

後裔（こうえい）今も現存する（1）：：鯨波三丁目佐藤

氏屋号玉屋

その椿は今も存す（1）、今やなし（1）、屋敷は遠く海底に（1）



嫁入り坂

国府の上杉家から、上条の上杉家へお嫁さんが来られたとき聞かれた道で、今の鯨波駅から御野立公園入口までの間をいう。

註1 道すじは、旧国道、鉄道の関係で幾度か変遷し、現在鯨波駅

裏手（海岸入口）から御野立公園入口に至る道路筋の家並の裏手にあたり、鯨波郵便局（根立知夫氏）裏庭一帯に往年の嫁入り坂の跡がわずかに残るのみ。

註2 同名「嫁入坂」が鬼穴入口附近から、御野立公園へ登る坂道にも名づけられている。これは坂が急で、のめりそうなことから、「のめり坂」が訛って、「よめいり坂」となったものといわれている。

鬼穴

鯨波の御野立公園の下に「鬼穴」と呼ぶ大きなほら穴がある。

これは大古人間が穴の中ですんでいた時代のあとである。故老のはなしでは、大昔、ここ鯨波あたりにはエゾ人が住んでいて、その中にたゞ一人狂暴なものがあって、人々を苦しめたので、それを「鬼」と呼び、その鬼がすんでいた穴であることから「鬼穴」という名が生れたものと伝えられている。

註1 この鬼穴は奥が深く、米山の頂上までつゞいているといわれている。

註2 国上山の酒天童子が角田の窟（いわや）、弥彦の洞穴（ほらあな）と賑々と追われ大江山へにげていく途中、この穴にこもったことがあるともいわれる。

袈裟掛の松

親らん聖人が越後へ流されておいでの頃のことであった。ある年柿崎からとほとぼとおあるきになり、鯨波から塔の輪にさしかかられた。見るとそこに大きな松の木があった。上人はその松の木にお袈裟をかけて、楽々と足をのびされた。この袈裟かけの松は、鯨波の国道にそうた山ぎわのところにあり、今は枯れて松の切り株があるばかりである。

黒牛

年に一度は佐渡から牛が渡って来る。佐渡の牛は必ず黒い牛で、この黒牛は遠い遠い飛弾（ひだ）の山おくまで買われていくのである。

佐渡の牛は船にのせられ、浪の静かな日に鯨波の海岸に到着する。それがいつも夜船で来る。牛をのせた船は鯨波の海岸に錨（いかり）をおろす、牛はくらやみの中でもうもうとなく、牛を陸あげするに

は、真夜中に火をたくのである。万事万たん用意ができると、陸ではさかんに火をたく、牛は赤い火を見ると急に狂い出し、角をふりたて、船からとび出し、浅瀬を泳いでかがり火目がけて突進する。むかしはこのような牛飼いの人々は、特殊扱いにして、世間では相手にしなかったものである。

鯨波地名のゆらい

その一
昔、鯨が波で打ちあげられた。

その二
昔は桂波（かつらなみ）とよばれていたが、ある年鯨が多くとれ、村中がゆたかになったので、それから鯨波といわれた。

その三
国守謙信公本間佐渡守をうったとき、難関にあったが、神明の加護によって無事着岸、鯨波（とき）の声をあげて大いによろこび、串白並を鯨波にした。

長者の酒井戸

昔河内の或る家の爺さんが、毎日山へ仕事に行くが、夕方家に帰

って来る時はいつでも酒によって帰ってくる。ばあさんはいぶかしくてならぬので、或時そっとぢいさんの後をつけて行ってみた。この井戸のところまで来たわけだが、酒の香がして来て、地中からフツツと酒がわき出している。

「これだな」とばあさんは思うたが、何を思うたか、井戸に向って小便をしてしまった。はなはだきたないはなしで、それから酒の出るのがやんでしまったという。

註 軽井川の「ばば清水」にまつわる伝説も内容が少しちがうが、ばばが小便するところなど、通じている。

水源地の天狗松

鯨波、水源地の南方、白雲滝の向う山に赤松の大木がある。目通り幹まわり三・二メートル、地上三メートルのところまで二股にわかれ、樹高八メートル、枝は片側に八メートルずつ、径十六メートルの傘をひろげたような枝ぶり、樹齢は約三百年、根元は土肌が出ており、昔天狗さんが夜ここで酒もりをしていたので、草木が生えぬのだとの伝説がある。

一足坂 (いっそくざか)

水源地、白雲滝の近くから、天狗松のあるところへ登る坂道の入

口は橋の少し上手で、一足坂(いっそくざか)と呼ばれ、けわしい岩山道で、昔薪炭運搬には馬以外になく、この坂も馬が往ききた。ある時馬の転落事故があり、供養のため、馬頭観音が建てられた。(天保五年とか)

この観音さんは一昨年、百数十年のこけを洗い清めて、鯨波の根立宗一郎さんの邸園(蒼風園)の一角に移された。またこの辺の上の頂上に古い道形のあるのは、戦国時代の戦略上に使われた道だと伝えられている。

塔の輪 (とうのうわ) 地名のゆらい

その一 塔のあった浦曲(うらわ)

昔、この辺から番神へかけて寺がたくさんあったといわれ、塔がたくさんあったところから「塔の輪」という地名が生まれた。

関甲子次郎文庫の中にあるものだけでも、天台宗大乘寺・妙行寺・真言宗万福寺・明蔵寺などがある(田村愛之助著鯨波雑記)

その二 「塔の輪」にまつわる諸説

「塔の輪」か「塔の原」か、又「塔の原輪」か、いろいろな表記がみられる。又「東の輪」とした文書もある。いづれが正しいか。正徳五年に出た俳諧の書物「小太郎」には「塔の輪」とある。

塔の輪は神屋敷か寺屋敷かということも、論議されているし、天満宮のあったところともいわれている。土地の人が「天満故園」とか「地藏沢」とかよんでいるところも近くにある。(桑山太市著柏

崎伝説集より)

その三 「東の輪」

昔は「塔の輪」と書いた。塔の輪千軒のいい伝えがある。塔のある曲輪という意。

明治十五年頃まで茶屋三軒あり、柏崎地方の旅客はここで送迎があった。西は東の輪の三軒茶屋、東は田尻山ときまっていた。

佐渡牛をもって来て放牧していたので、牛の松山という名が残っている。(関甲子次郎著甲子楼文庫より)

辯慶(べんけい)の硯石(すずりいし)

石の中に細い穴があり、その中にたまった水が真夏でもへらしないで、眼病をなおすといひ伝えられている。丸の中に阿弥陀の梵字がある。

明蔵寺、大乘寺、妙行寺、万福寺等の古寺があった古地であるから、その礎石であろう。

註1 この硯石、一説に「義経の硯石」ともいう。(内容同一、温古の栞)

註2 硯石の中央の水底には、お地藏さまがニコニコ笑っておられるということである。(桑山太市著柏崎伝説集より)

註3 この石一名「辯慶(べんけい)の投石」というものあり。仏塔の中心礎石であろう(田村愛之助著鯨波雑記より)

おべん・藤吉ものがたり(おべんが滝)

むかし、柏崎に藤吉という船頭があり、佐渡通いの船に乗りこんで、柏崎と佐渡の間をいきましているうちに、小木のおべんという女に見そめられ、深い恋仲となつてしまった。ところが藤吉には柏崎に家があり、女房子どももある身であつたので、おべんの恋に苦しんでいた。藤吉が柏崎に帰つたきり音沙汰ないので、おべんの方から、たらい舟に乗つて通うようになった。

人目しのであつていたものの、藤吉にとつて女心のはげしさがおそろしくなり、或る晩おべんが目あてにしていた番神岬のあたりをけしてしまった。目標を失つたおべんはゆくえがわからなくなり、その上嵐もきてとうとう難波して、なきがらは青海川の海岸に打ちあげられた。そこには、たまたま一条の滝が海へ落ちていたので、この滝をおべんの滝とよぶようになった。

註1 この伝説には諸説があつて、いづれを正統とすべきか疑問が多い。主役的人名もおべん・藤吉の外、おべんと番神堂の所化さ(僧)との異説もあり、全国を風びした名浪曲、寿々木米若の「佐渡情話」ではお光・吾作となっている。

註2 藤吉(吾作)の場合、職業を佐渡通いの船頭とする向きと漁

師とする説とあり、おべんの在所も小木と相川の二説があり。

註3 番神堂の所化さ説の場合、物語りの展開は、はじめ佐渡のおべんが難船して、番神岬にたどりつき、番神堂の所化さに一命をたすけられ、そ生して帰島したが、その所化さの美貌に一目ぼれして、夜ごとたらい舟で通いつめるすじになっている。

註4 おべんの滝の近くに「おべんの松」もあったという。

註5 資料文献

中村・西巻「柏崎」

関矢貞作「お辯が滝」

小山直嗣「お辯の松」

市観光室「所化さと佐渡の女の物語」

桑山太市「おべん」

「おべん物語」舞台劇台本

伝承者 室星董道 近藤善弥

新田山（四手の山）（四手の坂）

坂上田村磨呂が蝦夷（えぞ）と戦った時、四ツ手に軍陣を配した所である。

後年、四ツ手を四手と読み、死出の字をあて戦死した者が多かっ

たので、このようにいうたのである。とも伝えられている。

註 下宿の新田として人家の立ち始めた所であるから、新田山としてという説もある。

十院坊岩（越後岩）

昔、十院坊という寺があったが、海中に陥落した。今も其石附近に石地蔵がある。又越後岩とも呼んでいる。

日蓮上人が此岩に船をつけ、越後地なりしかと喜んだという。

越後岩（日蓮着岸の岩）

文永十一年二月の事である。日蓮上人は罪を許され、佐渡ヶ島より鎌倉にお帰りになることになった。上人のお乗りになった船は佐渡の港を出たが、とても海が荒れて、どうすることもできなかった。木の葉のようにゆれる船は、まさに転ぶくしようとした時、遙か向うからさし招く老人があった。老人は品のよい白髯（はくせん）をはやし、白装束をつけ、長い杖を持っておられた。この老人は金の鈴を振るような声で、「わたしが 水さき案内を致そう、：：わたしについておじゃれ」といって、難航をつゞけておられる上人の船のへさきに立たれた。

やがて海は穏やかになった。上人の船は番神堂の下海岸に無事に

着いた。そうして、上人は上陸第一歩を小さな岩の上にふまれた。この岩は今でもあって、越後岩といっている。白装束で水さき案内をした人は、番神堂のご本尊、八幡さんだということである。

註 「いるかの番神まいり」という話もある。

竜

(諏訪社の向拝)

下宿の番神堂は火災にかかり、再建されたのは明治七年である。この時の大工の棟梁は篠田宗吉で、その腕のよさは三階節にうたわれている。宗吉は桃山時代の豪放な力強い建築にあこがれておった。今日残っておる番神堂の建築、ことに彫刻は桐に鳳、水と亀も、どれもこれも大調子の桃山風のものである。

この番神堂の仕事場にふらふらと一人の若い男がやって来た。

「わしは旅の者であるが、わしにも仕事を一つさしてくれないか」と若い男はたのんだ。大工小屋に働いている篠田の大工、若い者は、風来の旅の男などてんで相手にしない。「だめだ、だめだ」と突っけんどんにいった。旅の男は消然として其の場を立ちのいたが、柏崎の土地に何か一つ自分の作を残していきたいという職人根性にもえていた。

番神堂から程遠からぬところに諏訪神社がある。ここにやって来た旅の男は、一心不乱に礼拝していたが、思い出したように奮然として、諏訪神社の向拝の梁に一匹の竜を彫った。竜のほりものは「彫勢工、貞秀」となって今でもある。

いささ橋

岬町の坂を上る途中にいささ橋という一寸気の付かないコンクリートの橋がある。

昔源義経が弁慶を連れて奥州へ下るとき、母の巴御前が柏崎へ入る時に死出の坂といって険しい坂があるから、気をつけて登りなさいといわれて来た。明治の前は普通の橋がなくて、川のところまで足元もあぶなげに歩いて登ったのだという。ところが義経が母に注意されて来たが、余りにもたやすい道なので、義経の国の「なまり」は「たやすい」ということを「いささもない」というのだそうで、「何といささもないではないか」というところから「いささ橋」と名付けたという。

註 この橋のかかっている川が「いささ川」である。いささの語義については、陽春海より川へ上って来る「いささ」——柏崎地方の方言シラスのこと、「鮫」と書く。この地方では鯨波の前方が有名であるが、番神町、番神湾にそそぐ小川にこの「いささ川」の名が冠してあるのはまことに地方色がふかい、親しみのある命名である。

三ツ石

番神町の東端に俗称三ツ石という処があり、沢山の岩がある。鳥

帽子岩、天狗岩、千鳥岩など一つ一つ名前がついている。

築港ができてからというものは、昔海の中にあつた岩が陸つゞきになった。この三ツ石の岩は、風の吹き廻し、潮加減によってゴンゴン鳴ったといわれている。そして、下宿、或は中浜の漁師たちは、三ツ石の岩が夜泣きするといつて、漁船を出すか出さないかを判断したそうです。

註1 近年柏崎港の相つぐ拡張工事で、ここ三ツ石は完全に内陸化され、堤防のコンクリートで大半埋没、ほとんどその痕跡を見出すに苦勞する程の変貌ぶりとなった。

註2 三ツ石が鳴ると明日は荒れなり―と古諺にあり。― 甲子楼文庫―より

蝦夷 (えぞ) 塚

―えぞ地蔵―

その一

坂上田村磨呂が当地方を平定した時に、死んだ蝦夷(えぞ)を弔うために後の人が建てたという。

その二

三ツ石の出ばなのところに一本の榎がある。遠くからこの榎はよく見える。この榎の下は畑になっているが、雨降りの後には土器や矢の根石などが見つかるといわれる。土器は縄文式のものである。大昔ここに蝦夷(えぞ)が住んでいたということで「蝦夷塚」とよんでおる。

ここでころび、けがするとしばらくおられないといっている。

註 この榎は「きざいみの林」と呼ばれ、有名であったが、昭和三十年頃惜くも伐られてしまった。

下宿の裸石(らせき)さん

裸石さんといえば、下宿や枇杷島や石地に安置されてあるが、有名なのは石地と下宿の裸石さんである。下宿の裸石さんは諏訪神社境内にあって、以前は雨露にさらされていたが、一小堂にとじこめて安置されている。土地の婦女子連はずい分信仰している。何故にこんなものを祀ったのであるかというに、昔この地は蝦夷(えぞ)人即ち愛奴人のすんでいた土地で、愛奴人は至って陰陽物を尊崇した。この裸石さんは愛奴人の遺物であるという説であるが、少壮男や婦女子の信仰するのは、消渴や淋疾の者が信心すれば、全癒すると迷信から奉納旗や灯明を捧げて拜することである。

弘法井 (一名茶の池)

むかし、まずしい風体をした旅僧がやって来て、一ぱいの水を乞うた。すると納屋で働いていた親切な老人が、

「さし上げたいが、このあたりは海が近いので真水というものがなく塩水ばかりです、それでよければさし上げましょう」といった。

勝願寺の勝負観音

旅僧は「その水でけっこう、何しろ長旅でのどがかわいて仕方がない、冷い水を一ぱいめぐんでもらいたい」それではとるので、老人は赤いおわんで水を出した。旅僧は大そううまそうに飲み、その余りの水を庭に静かにあけ「有難う」といって立って行かれた。あと、その捨てられた水の処から、こんこんとして水が湧き、その水は塩気のない真水であった。この旅の僧というのは弘法大師であったという。

この水でお茶を出すと、お茶の味が変わらず大そうおいしいということである。毎年八月七日、この水をいただく人々は弘さんのお祭をして感謝しているという。

註1 弘法大師の立寄られた家は小山某宅でお相手したのはその家の老婆であった。という説もある。

そのはなしのすじ道では、大師は、もらった水のみほしてから「まことによい心地であった。しかしこの水は水質が少し悪くて気の毒である。わしがよい水を見つけてあげるから、そこを掘ってみなさい」と笹一本をしるしとして立て、そのまゝ立去った。そこを掘ってみたところ、良水がこんこんとわき出した。とある。

註2 承前このめぐみを与えてくれた旅僧は弘法大師さんにちがいないというので「弘法井戸」という名をつけた。

勝願寺は昔比角にあったが、いつの頃か大洲村にうつった。境内も広く、浄土真宗中有名の寺である。宝物として源義経公のよろいびつの中に安置してあった。高さ約五・五センチの観音さんがあるという。どうしてこの観音さんがこの寺の宝物になったかというに、義経が兄頼朝と不和となり、越後路を通り奥州へ下向の折、この大洲村を通り、豊洲神社に参拝し、道中の安全を祈願した時、奉納したものである。

その後社殿が火災にあい、観音像は土中に埋れてしまったが、夢知らせがあつて掘り出され、観音様を神社におくのはふさわしくない、お寺に納めるべきであるというので、勝願寺をここに移して安置したものであるとのいい伝えである。

註1 豊洲神社の焼あとから観音さんが掘り出されるきっかけとなったのは、ある夜勝願寺の住職の枕もとにこの観音さんが夢じらせに立たれ、「東北の砂の中を掘れ」と仰せられたとある。

註2 この観音さんは勝ちいくさに強く、義経の信仰したゆかりもあり「勝負観音」とよばれるようになった。

註3 たゞし勝願寺の本尊はこの観音さんでなく、七十五センチの阿弥陀像である。

蟹が淵（かにがふち）

―えち助井戸の大亀―

えち助の井戸は蟹が淵（かにがふち）に続いているといわれている。その証拠には、えち助で井戸に落した鍋のふたがかにがふちへ流れ出て、鶴川の川口の方へぐんぐん流れて行ったという。

蟹が淵にすんでいた大亀が、いつしかえち助の井戸を根城とするようになつた。えち助では井戸の釣瓶（つるべ）をあかがねの丈夫のものでつくって使っていた。井戸の水を汲むたびに、金つるべは水底に音をたてておろされる。水底の大亀は、つるべが落されるたびに、ずどんずどんと頭をたたかれる。大亀は悲鳴をあげ、或る夜、この大亀は主人の枕もとに立って命乞いをした。

「こんどから子供の生肝（いきぎも）は決して取らないから、毎日、金つるべで、どすんどすんとわしの頭をうつことだけはやめてくれ。わしも長年子どもの生きぎもをとって大そう罪をつくったから、わしの命は不動さんにさしあげよう。どうかわしが死んだら、不動さんのお堂をたて、そこへ上げてくれ。」大亀がこういふと思つたら夢であつたという。

亀が淵

石なんご場の下の方、鶴川に亀ヶ淵とよぶ所がある。昔大きな亀がすんでいて水あそびする子どもの生き肝をとつたといわれている。

笠降り金比羅

柏崎の町広小路に柿村と小槌屋（こづちや）という二軒の家があった。柿村の家はおころもやで、金らんどんすの仕入に、毎年京都へ行った。京都へ行くときず四国へ渡り、金比羅さんをおまいりしてくるのであつた。

或る年のこと、小槌屋は柿村に頼んで、金比羅さんのお札をうけて頂くようお願いした。柿村は「承知いたしました。金比羅さんのお札をうけて来てあげましょう。」といつていくらかのお金とおさい銭を受取つた。

柿村は京都へ仕入れに参り、いつものようにその足で金比羅さん参りをした。そして小槌屋から頼まれたお札を受けようと思つて風呂しき包をみたら、お金がなくなつてゐる。

さあ大変、柿村は顔色をかえてさがしたが見つからない。小槌屋からあずかった包の金はおさい銭とまちがえてさい銭箱の中に投げこんだのであつた。それで柿村はこのことに気がついたので、社務所の係にとくと話したが、社務所の人は柿村が、ウンをついているものと考えてか取りあげてくれない。柿村は仕方なく、自腹を切つて、小槌屋から頼まれた金比羅さんのお札をうけた。

四国から本土に渡るには多度津から鞆津（ゆきつ）へ渡るのが一番便利がよろしい。柿村はこの船路をとり、小さな船にゆられていると、天空から、何かぴらぴらするものが降ってくる。船に乗合つた人達は、あれは何であるかと不思議そうに見ていた。ぴらぴらす

るものはだんだんと近づいて来る。そのうちに一陣の風がさっと吹いたと思うと、そのびらびらしたものは、柿村の冠っている笠の上に落ちた。柿村はその不思議なものをいそいで手にとって見ると、金比羅さんのお札ではないか。日頃信心している金比羅さんだと思ふと、今年こそ運が向いて来たようである。有難かった。

註 高田十郎著「奈良百題」の中に「お札の天降り」「天筆」など、これと類似の話がある。

柏の大樹

柏崎という地名のおこりは柏の崎というところから来たものだと
いわれている。

大昔、鶴川の下流、今の天京荘あたりに（石なんご場或はゼニ山）に大きな柏の木が一本あった。この柏の木はどこからもよく見えて、一つの目印になっていた。ことに遠い海の上からよく見えたので、船頭達は、この柏の上からよく見えたので、船頭達は、この柏の木のある岬を見当にした。

こんな具合で、いつとはなしに、柏の木のある岬、即ち、「柏崎」と呼ぶようになった。

大窪（大久保）

中浜砂丘かげの、大窪みの地であるから「大くぼ」と呼ぶように

なった。

御膳水

明治十一年、御巡幸の時、聖上にさし上げた水であるから、お膳水とよぶようになった。

文使い地蔵

— 西光寺 —

柏崎勝長の娘が文を認めて此地蔵に托し冥府在留の父君に届けてもらった返書があったという。

鐘が淵

柏崎、西光寺の下、鶴川の淵をなしているところを「鐘が淵」という。

むかしむかし、西光寺の鐘が、夜な夜な「海へ往こうか、川へ往こうか」と鳴るので、和尚が腹を立てて、「海へでも、川へでも勝手なところへ行きやがれ」と言うと、竜頭が切れて、ゴロゴロころけて下の鶴川に落ちて沈んでしまった。それからこの淵を「鐘が淵」という。

註1 此種の伝説は全国各所にある。

南蒲原郡鹿崎村の三千坊という伝説あり、同郡に胴鳴りという伝説あり、いづれも類似点がある。

註2 晴れた日、この淵をよくみると沈んだ鐘が見えるという。

註3 西光寺の何代目かの住職が、経文や過去帳をもってこの淵に入水自殺した。

註4 この淵は「魔の淵」とさえ呼ばれ有名となったが、特に天保十三年三月二十七日に起った中町、桜井良助と五宅楼の遊女玉菊の入水情死は有名で、口説きや常盤津になったり、三階節にまで唄われる。

西光寺の松

―上方詣りの松―

大久保の西光寺に一本の巨大な老松があった。―ある年の大雪で折れ倒れてしまったが―

この松が百五十年程前（昭和四十年から起算して）、一度枯れかけたことがあったという。それはこの松が上方詣りをしたため、上方詣りがすんで帰って来たら、再び樹勢が復活した。

なおこの松が上方詣りの途上、摂津のさる寺で路用の金子を借りたとも伝えられている。こういうことから、この松を「上方詣りの松」と呼ぶようになった。

註1 春の雪で折れた年月に二説あり、大正四年説と昭和九年説とあり、いづれが真か

註2 上方詣りの際、お隣りの極楽寺の貞心尼ゆかりの紅梅がお伴をしたというロマンもある

註3 この松の現存当時の写真が残っている。笹川芳三氏提供、「植物の友」第五二号昭和四十四年十一月一日号、記事三宮勉

註4 この松を別名「善光寺詣りの松」という向きもあったらしい。

註5 何代目かの住職が玄關を作ろうとして、この松の枝が邪魔になるというので、枝の一部を伐ったところ、その切り口から血のような液汁が出たが、間もなくその住職は死んだという。

疣(いぼ)地蔵

西光寺の参道を山門へ曲るカギの手のところに地藏様がある。地藏さんの前に置いてある花立ての水をつければ疣(いぼ)がとれると伝えられている。

蓮糸のまん陀羅

極楽寺の第二十四世、単誉上人のお弟子に単瑞という人があった。

この人は十六才の時に発心して、相州大住郡四之宮村の大念寺におられた人です。

極楽寺のまん陀羅は、この単瑞上人が大念寺に居られる時、九ヶ年かかって織られたものだと言えられている。織糸は蓮からとって織られたものだといひ、蓮糸の織維は極楽往生の縁を結ぶといわれている。

註 この大まん陀羅は昭和四十五年、市政三十周年記念、市立新図書館開館記念に公開された。

猫入りのまんだら

極楽寺の宝物にお釈迦さんの大きな涅槃像がある。この涅槃像には珍しく猫が一匹描いてあるという。……どこの涅槃像にも猫は描いてないというのに。

極楽寺何代目かのある住職が、釈迦の涅槃像を一生けん命に描いていると、どこからともなく猫がやってきて、ニヤンニヤンと鳴いておった。これが一日だけでなく、釈迦の涅槃像ができ上るまで、毎日来て鳴いていたという。そこで上人がある日、猫の頭をなでて「お前も描いてもらいたいのであらうか」といって、そばに鳴いていた猫を写生して、この涅槃像の中にお描きになったものだという。

註 この話は京都の或るお寺の涅槃像にもある。

極楽寺の孟宗竹

山田甚次郎の弟喜四郎、薬種仕入のため、持舟慶寿丸にて上阪の折、同地の北四里ばかりの能谷という村の仏眼寺に東嶺智覚禪師を訪ねた。禪師は平井村西巻重蔵より出て、喜四郎の伯父である。禪師は土産にといひ、孟宗竹の根を与えた。喜四郎がこれを持ち帰って極楽寺に植えた。当地方の孟宗竹はこれが始めて、この子を各所へわけ与えてひろがったという。

地藏打ち首

明治五年柏崎県庁の頃、古志郡片田村辺で、水中出現の石地藏を尊崇し、堂宇建立の大騒ぎがあった。柏崎県校の教師小林亮が諸分校巡視のため、片田村より二十村を経て栃尾町に行こうとした途上、この狂奔するさまを見て、民心を冷やそうと思つて、地藏に犯由碑という札を地藏の側らに建てた。

犯由碑の文面

本因 天竺浪人 石野地藏

此者、其名に背き地中に蔵れず人界に出で、衆生済度と唱えながら水中に陥り、自ら浮び能はざる事名実共に空し、然るに之をも恥じず、奸人と申合せ面目をつくるい、愚俗をあざむき、米金をかすめ己の栄耀（えいよう）を営み候段、苦界に沈みし賤岐の

所業にも劣り、重々不屈至極に付、弥勒菩薩の出世迄長く此所に曝し置くものなり、もし風雨を覆い遣す輩有えに於ては屹度とがめ可申付事

明治五年壬申

地獄庁

然るに地蔵の側を流るる清水は眼病に効ありと、人々の信仰を得、ますます大流行にて、風俗を惑わす事が甚だしかったので、柏崎県は偵吏を派して調査させた。偵吏が清水の源をしらべたところ、眼病の漢薬を袋の中に入れてあったのが見つかった。頽廢した寺の住持と旦那のはかりごとであった。この兩人にかまわず偵吏は不埒の地蔵であるといつて、繩をかけて泉庁へ引いて来て糺明した。

法廷審問の末、打首の上庁舎の踏石と宣告し、沓ぬぎ石の代りとした。然るに其頃極楽寺に英舜という有徳の老僧があった。地蔵を助けるは英舜の役と泉吏に願つて保釈の許しをうけ、自山の境内に引取り、もがれた首をつなぎ、本堂と隠寮の間に安置した。

明治六年慶應の際、片田村辺の人たちは柏崎監禁の地蔵尊がもとの所へ帰りたいとの御夢知らせがあったからとともらいに行こうではないかと数十人の信男信女が英舜老師の許へ来り、かけ念仏善の綱、大さわざで故郷へ戻したという。

狐の贈物

一矢代文郷（ぶんけい）さん一

大洲村荒町に矢代文郷さんという名高い医者で慈悲深い人があつ

た。墓碑は勝願寺境内に建てられている。

この文郷さんが、ある日鯨波の病家へ診察に行った帰途、塔之輪原にさしかかると、ひとりの男が路ばたに立っていた。時刻はすでに暗く、附近には家もなく、「誰だ」とがめたところ、あたまをさげていうには、わが家のよめが今、難産で命があぶないので助けてもらいたいと思つてあなたのおかえりを待っている者です。どうぞみてやって下さいという。文郷はそのことば通り、小徑をたどつて松林の中に入ると、一軒の家があった。文郷はすぐに手をくだして、間もなく男の子が生まれた。男は再び文郷さんを塔の輪原まで送つて別れた。

翌日鯨波村へ行ったついでに立寄ろうと、その辺をたづねてみても見当たらない。不思議に思つていたところ、数日たつて、その附近の人に此の山に狐でも子を生まなかつたかとたゞしたところ、近頃狐がこの向うの山で子をうんだという。そこで文郷さんは先日男は狐で、一軒屋は狐のすみかであつたことがわかつた。

それから十数日たつた或朝、文郷さんの玄関先に大鯛二匹おいていた者がある。よくしらべてみると歯のあとがあつた。そこでこれは狐が礼に持つて来たのであると、いつたえられた。

大窪いなり

大窪いなりは豊川いなりの分身だという。

大窪いなりは子どものとびひ（皮ふ病）にご利やくがあるというので、参けいの人があとをたたなかつた。ところが大窪いなりを所有

していた歌代さんという人が東京へ引っこししてから、お堂はあれはてて、秋になると芒や尾花がのびるだけのびて、お堂をかくす始末であった。

その後荒町の御たけさんが寄附されたが、境内の木は比角の木びきさんが買った。木びきさんが木を伐っていると、一匹の狐があらわれて、さもうらやましそうに、うろうろし、小首をかしげていた。木びきはうす気味悪くなって、持っていた金づちを白狐になげつけると、白狐はすっと身をひるがえして逃げ去った。そのいたづらのたゞりか、その木挽きは首つりして自殺したという。

今ははれものにご利益があるというので、旧に倍する繁昌だという。

大久保の西光寺

大久保の西光寺といえば景色がよいので知らぬ人はない。有名な上方詣りの松が枯れたのはまことに惜しいことである。この寺はもと最光寺と書いたものである。しかるにいつの時代かに、西光寺に改められたが、これには伝説として、本尊の阿弥陀如来にもとづくとのことである。全体この阿弥陀如来は同村鑄物師某の裏地の畑中より掘り出したもので、その鑄物師は至って阿弥陀仏を信仰していたが、裏の畑の中、二メートルばかりもあらうと思われるところが、いくら雪が降っても少しも雪がつかまらない。それで不思議に思っていたが、或夜そこから金色の光が見えた。これは怪しい火であると思つたが、それ程気にしないでいたところ、四五夜続いて発光する

ので疑心を抱いて、ある日おそるおそる鍬でその発光するところを掘ってみた。すると不思議にも金仏が一体あらわれた。これはわが家の幸運と喜んで早速仏間にお迎えし、燈明あげて礼拝していたが、在家に安置するのはもったいないといって、近所の最光寺におさめた。丁度寺より西方に当る地中から発掘した仏であるからというので、寺号をかえて西光寺と称することになったという。

劍野

一 鴨丸の劍・三島神社

三島神社の劍についての伝説がある。

鳥羽天皇保安四年賊があり、齊倉を破って宝劍を盗みとって逃げ出した。するとたちまち神罰をこうむって、眼くらみ、神社より二キロメートルばかりはなれた延命が池に迷い入りおぼれた。その時宝劍も沈んでしまった。

三年ばかりたって、鴨が一羽どこからともなくとんで来て、水底深くもぐって、宝劍をくわえて上り、池から三・四百メートルはなれた小高い丘の上に落とし、鴨はいづこかへとび去っていった。そこを鴨八幡宮とあがめまつり、それよりその宝劍を「鴨丸の劍」といった。

その池の水がかれて田地となり、今では「鴨くぐり」という字が残っている。(社記による)

その宝劍の納めである地であるによって、「劍納」と称し、後に「劍野」と改められた。

註 劍野の劍の字、劍とも書くことしばしばあり、不定

鏡が沖

宝徳年間、三島神社が雷火で炎上した。

その時、神鏡がどこかへ飛びのき給うた。神主は大いに驚いて、七日七夜、潔斎して行方を祈った。祈願の満つる七日寅の刻に、神木の霊松がにわかに鳴り、雷もはげしく、雨もふり、山くずれまでおこった。すると十日東方四百メートルの地が、湛水して湖と変じた。辰巳の方五百メートル余りの水中に光るものがある。不思議に思い、小舟にさおさして漕いでいってみると神鏡があった。そこで謹んでお守りし、神社に帰った。

そこで即ち、神鏡の出現した所であるから「鏡が沖」と称した。

(三島神社由緒)

鶴松

― 御休場 ―

御休み場は枇杷島村字劍野地内にあり、昔は鯨波村塔之輪よりの山道を経て、新道に出たもので、枝の姿がちょうど鶴が翼をひろげたような松の樹のある所である。

戦国の際の上条城主弥五郎と枇杷島城主宇佐美定行とは同じ謙信公の家来でありながら、仲が悪かった。そこで定行は弥五郎を己の領分地内を通さない、弥五郎は春日山へ登城するときは枇杷島を

通らないで、新道から鯨波へ出た。其時は此処で一休みして日本海を眺めたというので、この名をつけたといひ伝えている。

註1 枇杷島城主宇佐美定行が、この松に鞍をかけて、領地を望見したので、「鞍掛松」という別名もあった。

註2 又一説に劍野村が松平氏の領地であり、その息女鶴姫の化粧料地であったところから、「鶴松」という名がついたともいわれている。

劍野庵の如来

劍野庵は枇杷島村大字劍野にある。庵である。此庵の本尊阿弥陀如来に就て次のような伝説がある。

元来大洲村極楽寺の大迦藍は高田村横山にあったものであるが、領主の命により現地に移転したとのことである。その寺院取り崩しの際土台石を除いたところ一阿弥陀如来を発掘した。これは不思議である。土中に埋めさせておけば仏罰をこうむるので、極楽寺へ納めたが、一人の尼僧がこれをきいて、方丈にねがって一庵を創建し、本尊として、礼拝したのが即ち今日の劍野庵であるという。

寺田

― 香積寺沢 ―

劍野の西方、劍野山のすそに寺田（一名香積寺沢）というところ

がある。現在栢崎市街の中（島町）にある香積寺があったところだといわれている。

註1 田の中に礎石が残っていると伝えられている。

雨ごいの青竜

一 鵜川神社の縁起一

ひでりの時、村の百姓達が鵜川神社に集って雨ごいの祈禱をしていると、両頭の青い竜が御堂の中から現われてサトが池の方へ歩いていった。とたんに空がかきくもり、大雨が降ったという。

血豆石

血豆石は栢杷島村の上向の火葬場附近の路上に、約三十センチばかり突き出ている安山岩の石である。通行人がこの石に少しでもつき当れば、必ず血豆ができるので、人々は大いに恐れていた。そこでこれを掘ってすてようとして人夫をかけて掘ったが掘り切れないで困っていた。

行通寺

開山は法教坊という名の坊さんで、この人は天正三年の頃、能登

国鳳至郡（ふしげぐん）下村の城主で佐々木大権頭といった。越前の国、吉崎別院で慧燈大師の直弟子となり、法教という名をいただき、後に光立山行通寺という寺号をもらった。

或年越前吉崎より若狭国小浜へ渡海しようとした時、海上暴風にあつて、舟が転ぶくしようとし、難波を極めた。その時上人が南無阿弥陀仏の六字の名号を書いて船頭にかかげたところ、不思議に暴風にもかわらず、舟は少しもゆすれないで、矢のように走り、無事に又吉崎に帰ることができた。そこでこれを波分けの御名号を唱えた。この名号と如来とを上人より給わり、末寺を能登に残し、三代目法林に至つて、越後国加茂の下条に移った。更に又三代を経て琵琶島に移った。時に天正八年である。之より引きつゞき二十二代の今に至っている。

亀が淵

亀が淵は栢杷島を流れる鵜川の流域中で金曲輪橋の下方にある淵の名である。

昔鵜川神社がもえた時、ご神体が見えなくなつてしまった。神主をはじめ村民一同はその念を抱いていたがやむをえず、仮宮殿を建築し、ご幣だけまつて居たところ、或夜神様が亀にお乗りあそばされて鵜川をさかのぼつておいでになつたところであるから、亀が淵という。

註1 鵜川の下流、蟹が淵の近くに亀が淵という地名があり、昔大

亀がすんでいた……(柏崎地方伝説集、桑山太市)

註2

鵜川神社という名の神社は、鵜川の上流から下流へかけて四社あり、社名は同じであるが祭神は必ずしも同じでない。次表の通り。

No. 1 黒姫山頂 美都波能売命(みづはのみこと)

No. 2 野田村 全

No. 3 新道 誉田別尊(ほんだわけのみこと)

配祀 息長足姫尊

玉依姫尊

No. 4 枇杷島 誉田別尊

鵜草(うかや)ふきあえずのみこと

鏡が沖

鵜川神社

神武天皇の御父ウガヤフキアイズノミコトが大亀に乗り、遠く越の国の海原においてになった。清い河水の流れ入るをご覧になり、さかのぼらせ給うた。清い瀬ごとに鵜の数多く群れあそぶのをミコトは誕生より鵜に縁故があって、常にお好みになったので、これを深く愛(め)で給い、大亀に乗り捨てご上陸あらせ給うた。そこを今は亀が淵という。

ミコトは、ここは朝日のただ射す処、夕日の照るところ、清き河内なりと詔りになって、しばらく神留りになった。その神鎮まりし

跡のお社が、すなわち鵜川神社である。よってこの川を名づけて川曲(かわくも)の県を鵜川の県という。後の鵜川の荘である。

ミコトがこの川曲においてになった時、竜宮より河童をお使として、雌竜雄竜の霊体を鏡のくしげに入れ、たてまつった。

ミコトは二つの竜をとり近くの湖水に放ち、そのしずめとさせた。それで名づけて鏡の湖となった。

中古に至って、この湖水の水がかれ、ようやく開け桑田となった。この時竜神は六十センチメートルばかりの木像の竜となった。里人はこれを鵜川神社に奉った。今も霊徳かくしゃくとしている。

鏡が沖のおうたが火

比角村におうたという女があった。この女に意中の人があり、枇杷島の男なので、夜な夜な通うて行った。

一方おうたに恋している男があり、此の事を知り大いに恨み怒って、鏡が沖におうたを待ち受けて殺してしまった。

それから光円寺附近から怪しい火が出て鏡が沖に飛んでいく。これを「おうたの火」といい伝えている。

註1 昔比角におうたというロクロ首の女がいて、夜な夜な出たのを、妖怪(ようかい)なりと或る武士が斬ったところ、その首が飛んで鏡が沖の方へいった。

おみかの火

「おびたの火」

つめたい雨がしとしとふる夜、鏡が沖にしばしば点々と火が見える。集っては散り、散っては又集る。里人はこれを「おみかの火」という。

その昔、おみかという関東の女が、半田の大工某の妻となったが、大工某は半田に帰ったまゝ、数年たつても妻のもとに帰って来ないので、妻は後を追って来てみれば、すでに妻のある男であった。おみかは非常に嘆き且つ恨み、鏡が沖で顔を整えようと鏡を出して見たところ、わが顔は妻たる鬼相に変わっていたので驚きの余り悶死（もんし）した。

それでそのあたりを「鏡が沖」という。一説に「おみかの火」は「おびたの火」で、その火の見えるところは三本松という所の附近という。

註 鏡が沖を舞台とする、女性にまつわる伝説が数多くあり、その内容、主人公の名がいろいろまじって、こんとん且つあいまいもことしてゐる。

即ち「おうた」、「おみか」、「おびそ」、「お静」、「清野」……と登場人物が多く、物語りと人名が、こんがらがって、いづれを正統とするか定めがたい。

福泉寺

そのむかしは天台宗で、常在坊という庵室であった。文永八年十月十日日蓮上人、佐渡御難の折、嫡弟子日朗が、鎌倉を出て便船を得佐渡に渡り、高祖日蓮に遭い直ちに帰り、柏崎に着し宿を常在坊阿闍梨福泉法師に求めた。法師は之を許し、終夜議論をたゝかわし、遂に日朗に従い、法号を授けられ、改宗して福泉院日舟と言った。其の後日朗師は再び佐渡に往復のとき山号を給い、常在山福泉寺と改め、法華宗門のお寺とした。これは弘安六年五月のことで、当山の元祖である。しかしその後寺は百年余の間無住となった。大覚大僧正の弟子妙覚隆日聡上人という人が嘉慶元年四月三日当寺を再興し宇佐美貞行琵琶島城を領するとき、即ち永祿四年正月に来て、祈願所とした。これから打続き三十九代の今日に至っている。

